ベルグソン

道徳と宗教の二源泉

中村雄二郎訳

明日への思索と行動のために

《哲学思想》名著選

白水社

定価1500円

1010-31330-6911

白水社

ベルグソン
道徳と宗教の二源泉
定価一五〇〇円
一九七八年一〇月一〇日印刷
一九七八年一〇月二〇日発行
訳者 ©中村雄二郎
発行者 中森季雄
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京九一三三二八
郵便番号一〇一
理想社印刷・加瀬製本
(分) 1010 (製) 31330 (出) 6911

ベルグソン

道徳と宗教の二源泉

Titre :
LES DEUX SOURCES DE LA MORALE
ET DE LA RELIGION.
Auteur :
HENRI BERGSON.
Éditeur :
PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE.
Date :
1932.

© PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE, 1932.
Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha.

ベルグソン

道徳と宗教の二源泉

中村雄二郎訳

白水社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　道徳的責務……九
社会的秩序と自然的秩序……九
社会における個人……一五
個人における社会……一九
自発的な服従……二三
抵抗への抵抗……二四
責務と生命……二六
定言命令……二九
閉じられた社会……三五
英雄の呼び声……四〇
情動の推進的な力……四四
情動の創造的な力……四八
情動の表象的な力……五七
魂の解放……六二
前進……六四
閉じられた道徳と開かれた道徳……六九
閉じられたものと開かれたものとの間……七六

自己尊敬……一七
正義……一八四
圧力と渇望……一九六
道徳における主知主義……二九
道徳における「生命の飛躍」……二二
調練と没入……二六
第二章　静的宗教……三三
理性的存在における不条理……三三
仮構機能……三七
仮構と生命……三三
「生命の飛躍」の意味……三三
仮構の社会的役割……三八
断片的人格……四八
秩序破壊に対する保証……四九
意気消沈に対する保証……五三
有益な仮構の一般的主題……五六
不条理なものの異常発達……六一
予見不可能なことに対する保証……六四
成功への意志……六七
偶然……七一

文明人における原始的心性……一九
魔術一般……一九五
魔術の心理学的起源……一九八
魔術と科学……二〇四
魔術と宗教……二〇八
精霊信仰……二一一
類として扱われた動物……二一八
トーテミズム……二二〇
神々の信仰……二二四
神話的空想……二二九
仮構機能と文学……二三四
どのような意味で神々は存在したか……二三九
静的宗教の一般的機能……二四三
第三章　動的宗教……二五三
宗教という言葉の二つの意味……二五三
なぜ同一語を用いるか……二五六
ギリシアの神秘主義……二六一
東洋の神秘主義……二六七
キリスト教の神秘主義……二七四
神秘主義と刷新……二八一

イスラエルの予言者たち……二九〇
神の存在……二九一
神秘主義の哲学的価値……二九六
神の本性……三〇三
創造と愛……三〇六
悪の問題……三一二
死後の生命……三一八
第四章　結論　機械説と神秘説……三二三
閉じられた社会と開かれた社会……三二三
自然的なものの永続……三二八
自然的社会の性格……三三三
自然的社会とデモクラシー……三三九
自然的社会と戦争……三四三
戦争と産業時代……三四八
傾向の進化……三五三
二分法と二重の熱狂化……三五五
単純生活への復帰可能性……三六三
機械説と神秘説……三六七
解説……三八五

第一章　道徳的責務

社会的秩序と自然的秩序

禁断の木の実の想い出は、われわれ一人一人の記憶の中で――人類の記憶の中でもそうだが――もっとも古いものである。この想い出は、われわれがより好んで思い出す他のさまざまな想い出に覆われていなかったら、われわれはそれに気づいていたはずだ。なんの拘束もなしに野放しにされていたとしたら、子供のときわれわれはどうなっていたか！　快楽から快楽へととびまわっていたにちがいない。だが、そこには、見えもしなければさわれもしないじゃま物があらわれた――禁止がそれである。どうしてわれわれはそれにしたがったのか？　疑問をいだくことはほとんどなかった。両親や先生方のいいつけをまもることは習慣になっていた。もっとも、そうするのは、それが両親であり先生であるからだ、ということは、はっきり感じていた。それゆえ、そうした人々の権威は本人自身のものではなくてわれわれに対するその地位によるのだ、ということもわかっていた。かれらはあるなにがしかの場所を占めていたのであり、まさにそこから浸透力をもった命令が発せられていた。命令の発せられたのがほかからであったなら、それだけの浸透力はもたなかったにちがいないのだ。いいかえれば、両親や先生方は委任をうけて行動しているように思われた。われわれはそれをはっきりと理解していたわけではなかった。が、両親や先生方の背後に、かれらを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とおしてわれわれの上にまるごとのしかかる巨大な、あるいはむしろ茫漠としたなにかが存在していることは、見抜いていた。もっとあとで言うが、それは社会であったわけだ。その社会を哲学的に考察し、一つの有機体になぞらえることも、その折にする。その有機体にあって、細胞はそれぞれ、目にみえぬ絆で結びつけられ、相互に巧みな階層秩序をもって位置づけられ、全体の最大利益のためには部分の犠牲を要求しうるような掟に、おのずからしたがうようになっている。もとより、これはたとえにすぎぬ。必然的な法則にしたがう有機体と、多くの自由意志によって構成されている社会とは、それぞれ別のものだからである。だが、これらの自由意志はひとたび組織化されると、有機体に似る。そして、多かれ少なかれ人工的なこの有機体にあっては、自然物における必然性と同じ役割を、習慣が演ずる。この第一の観点からすると、社会生活というものは、共同体の要求に応じた、強かれ弱かれ根づいた、習慣の体系のように思われる。それらのうちのあるものは命令の習慣であり、社会的委任によって命令する人物にしたがうにせよ、漠然と知覚されあるいは感じられた社会そのものから非個人的な命令が発せられるにせよ、大部分は服従の習慣である。これらの服従の習慣のどれもが、われわれの意志に圧力を加える。そうした習慣からのがれることもできるが、そのとき、われわれはその習慣の方へ引かれ、ふたたびその方へと赴く。垂直線からはずれた振子よろしく、である。秩序がみだされれば、回復されるべきは当然である。要するに、どんな習慣によってもそうだが、われわれは責務を負わされていると感じるわけだ。

だが、それは比べるものがないほどいっそう強力な責務である。ある大きさに対して他の大きさが切りすてうるくらい前者が大きいときには、数学者たちはそれを別のオーダーのものだ、とい

う。社会的責務についても同じだ。その圧力は、他の習慣の圧力にくらべて、きわめて大きく、程度の差が質の差をもたらすほどである。

事実、注目すべきことには、この種の習慣はすべて互いにささえ、ささえられている。それらの本質と起源について思いめぐらさずとも、それらの間に互いに連関があることは、おのずと感じられる。というのは、そうした習慣は、われわれの直接の周囲の人々から、あるいは周囲のまた周囲の人々から――こうして最後まで行くと社会に達しよう――われわれに要求されているからだ。習慣のそれぞれが、直接あるいは間接に、一つの社会的要求に応えている。そして、そこから、全体が互いに助け合って、一つのかたまりを形づくっている。もしそれらが別々に現われたとしたら、多くは些細な責務であったろう。だが、それらは責務一般に不可欠な部分をなしている。そして、この全体はその部分の持ち寄りから成り立っているので、返礼に、部分のそれぞれに全体の総体的権威を授与する。こうして、集合体が単独なものを強化するようになり、「義務なのだから」というお定まりの言いまわしが、単独の義務のまえでなら抱きかねない躊躇にうち克ってしまう。実をいえば、部分的な拘束が相加わってできた一かたまりの全体――それらの部分が全体的な責務を構成するものとして――を、われわれははっきり考えているわけではない。もっといえば、おそらくそこでは、実際には、部分の合成などは存在しないのだ。一つの責務が他のすべての責務からひき出す力は、むしろ生命の息吹きに比せられる。有機体の一要素である一つ一つの細胞が、不可分かつ完全なものとして、有機体の奥底から吸い上げる生命の息吹きに。社会は、その成員の一人一人に内在的なものであるが、そうしたものとして社会は、多くの要求をもっていて、それらは大小を

問わず、いずれも同じように、社会の生命力の全体を表現している。だが、くりかえし言うが、これもまだ一つのたとえにすぎない。人間の社会というものは、多くの自由な存在の一個の総体である。社会が課した、そして社会の存続を可能にする拘束は、社会のうちにある規律正しさを導き入れる。そうした規律正しさが生命現象の不屈の秩序に単に類似しているだけである。

ところが、そうした規律正しさが自然のそれと似かよっているということを信じさせるべく、すべてが力を合わせている。人々が一致してある行為をほめたたえ、他の行為を非難する、というようなことだけを言っているのではない。価値判断の中に含まれた道徳的掟がまもられていないようなときでさえ、人々はそれがまもられているかのようにふるまう、とわたしはいいたいのだ。街を散歩しているときに病人たちを見ることはないが、それと同様に、人間性が見せている建物の正面の裏側に不道徳が存在しているかも知れぬことを考えない。他人を観察するだけにとどまるなら、だれもなかなか人間ぎらいになりはしまい。自分自身の弱点に目を向けることから、他人をあわれんだり、軽蔑したりするようになるのである。そのとき、顔をそむける人間性は、自分の奥底に見いだした人間性なのである。悪は実にうまく身を隠し、秘密は実にあまねくまもられているので、ここではだれもがみんなに欺かれている。つまり、他人をどんなに厳しく批判するふりをしてみても、心の底では、自分よりはましだ、とわれわれは考えているのである。このような幸福なる錯覚の上に、社会生活の大部分は成り立っているわけだ。

当然のことながら、社会は全力を挙げてこうした錯覚を助長する。社会によって制定され、社会秩序を維持するさまざまな法は、しかし、ある側面では、自然法則に似ている。哲学者の眼から見

た場合には、この相違は根本的なものであって欲しい、とわたしは思っている。確証する(コンスタテー)法則と命令する(オルドネー)法とは、それぞれ別のものだ、と哲学者はいう。人は後者からは免れることができる。それは拘束はするが、無理強(キセシテー)いはしない。それに反して、前者は不可避的である。なぜなら、もしなにがしかの事実がこの法則の外にあるとすれば、それが法則として見なされたことがまちがっていたことになるからだ。真の法則は別のところにあることになり、人はそれを、観察するものすべてを表わすような仕方で述べるだろうし、その場合、さきの法則にあてはまらなかった事実も、他の事実ともども、この法則にしたがうであろう。——それはそのとおりだ。が、このような区別は、大多数の人々にとっても同様に明白であるわけではない。物理的な法則も、社会的あるいは道徳的な法則も、かれらの目からみれば、みな等しく命令である。自然の秩序というものがあり、これは法則によって、表現される。つまり、さまざまな事実はこの秩序に合致するためにそうした法則に「したがうことになる」というわけだ。科学者自身でさえ、法則はさまざまな事実を「支配し」、したがってそれらに先行するものであり、プラトンのイデア——事物がそれに則るべきイデア——に似たものだ、との考えから免れがたい。普遍化の梯子を上に昇れば昇るほど、否でも応でも科学者は、この命令的性格を法則に賦与するようになりがちである。つまり、自分自身と真にたたかうことなしには、力学の諸原理を次のようなものとして想い浮かべざるをえない。近代科学がいわばもう一つのシナイ山〔旧約聖書でモーゼが「十戒」を授けられたという山。〕上に捜しに行ったこの上なく崇高な石板の上に永遠不変に刻みこまれているものとして。だが、物理法則がある普遍性に達した場合、それはわれわれの目には命令のかたちをとってみえるとすれば、反対に、万人に向けられる命令は、いくぶん自然法則の

ようにわれわれにはみえる。この二つの観念は、われわれの精神の中で出会って、そこで持物を交換する。法則は命令から権威的なものをうけとり、命令は法則からそのもつ不可避的なものをうけとる。こうして、社会的秩序に対する違反は反自然的な性格を帯びる。つまり、このような違反は、頻繁にくりかえされるところで、自然における怪物同様、社会での例外であるかのような印象をわれわれに与えるわけである。

社会的命令の背後に宗教的な掟をみとめた場合にしてからが、そうだ！　この両者の関係はたいして重要ではない。宗教なるものがどのように解せられるにせよ、また宗教の社会性が本質的なものであるにせよ偶然的なものであるにせよ、次の一点だけは確実だ。それは、宗教がいつでも社会的な役割を演じた、ということである。もっとも、この役割たるや複雑で、時代とともに、場所に応じて変化する。が、われわれの社会のような社会では宗教のもつ第一の効力は、社会のさまざまな要求を引き受け、それを強化することである。宗教はそれよりはるか遠くまで進みうるが、少なくともそこまでは行く。社会は刑罰を制定するが、その刑罰は罪なきものを鞭うち、罪あるものを赦してしまうこともありうる。社会は善行に対してはほとんど報いない。社会の目は大ざっぱで、ほとんどのことに満足しない。とすれば、善行への報いと刑罰とをしかるべく考量するような人間的な秤はどこにあるのか？　だが、プラトンのイデアが実在を――その模造品しかわれわれには知覚されない実在を――完全無欠にわれわれに開示するのと同じように、宗教はわれわれを、多くの制度・法律・風習などがたかだかそのもっとも目立った点を、それも間隔をおいて指し示すにすぎない、国家（シ）の中につれこむ。この地上では、秩序は近似的なものにとどまり、また人々によって多

かれ少なかれ人工的に手に入れられたものである。が、天上では、それは完全であり、それ自身で実現する。したがって、宗教は、常識的なさまざまの慣習によってすでに狭められた、社会の命令と自然の法則との間の間隙を、われわれに見えないようにふさいでしまう。

社会における個人

こうして、われわれはたえず同一の比較に立ちもどる。それはさまざまの側面で不完全なものだが、われわれの当面の問題についてはうけ容れうる。国家(シテ)の成員は有機体の細胞のように相互に助け合っている。慣習は、知性と想像力の力をかりてかれらの間にある規律を導入する。そしてこの規律は、判明な多くの個人の間に連帯性をうち立てるという点で、大ざっぱにみれば、互いに吻合している細胞から成る有機体の統一性に似ている。

くりかえしていうが、社会秩序を事物のうちに観取された秩序の模造品たらしめようとして、すべてが力を合わせている。われわれはだれでも、自分自身と向かい合っていれば、自分の趣味や欲望、また気まぐれに従いはするが、他人のことは考えないことは自分の自由だ、とはっきり感じている。だが、そういう気持がはっきりしたかたちをとらないうちに、社会力のすべての集積から成った対抗力があらわれてくる。すなわち、この力は、一人一人をその方向に導く個人的動因とちがって、自然現象の秩序と似ていなくはないある秩序に帰着することになる。有機体を構成する細胞は、一瞬意識的になったとして、解放されたいという意図を思い浮かべるやいなや、たちまちふたたび必然性によってとらえられてしまうだろう。社会の部分をなしている個人は、その必然性に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com